



Title	固定性概念の有用性と二つの可能性について
Author(s)	本山, 明日香
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 101-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

固定性概念の有用性と二つの可能性について

本山 明日香

要旨

本稿では、「固定性 (rigidity)」概念は形而上学的可能性に与つてのみ重要であり、この特徴を見落としたことがジョゼフ・ラポルテとステファン・シュワルツとの間に固定性概念をめぐる不毛な論争をもたらしたと主張する。ソール・クリプキは『名指しと必然性』において、固有名の固定性概念を用いて可能性を考察する。この固定性概念が一般名辞に適用可能かどうかをめぐってジョゼフ・ラポルテとステファン・シュワルツとの間にはここ数年いくつかのやりとりが交わされている。だがこの典型的な議論において、両者の見解はすれ違っている。特に顕著なのは、一般名辞の指示対象をめぐる問題においてである。

このすれ違いにおいて重要なのは、固定性の関わる重要な側面を彼らがともに考慮に入れていない点である。第一に、固定性は私たちの直観的な可能性理解を支え、名前と対象との関係を保つ概念である。第二に、固定性概念は二種類の可能性概念と関係する。ここで二種類の可能性とは、認識論的可

能性と形而上学的可能性である。第三に、固定性は形而上学的可能性にとつて特化されている。

以上をふまえると、ラポルテの固定性理解は形而上学的可能性に属し、シュワルツの理解は認識論的可能性に属する。しかし、二つの可能性の片方のみを基盤にしているという点で、両者の固定性理解はともに不十分である。最後に、固定性概念がそもそも直観的概念であるため、形式化することは非常に難しいと結論する。

キーワード

固定性、ソール・クリプキ、記述主義、一般名辞、二つの可能性

0. はじめに

ソール・クリプキは一九七二年に『名指しと必然性』の中で、可能世界を用いて様相概念を分析した。その際同書において重要なポイントとして提示されたのが「固定性 (rigidity)」概念である。彼はこの固定性概念を提示する際、二種類の可能性、すなわち認識論的可能性と形而上学的可能性とを示した。本稿は、固定性概念は形而上学的可能性にとつてのみ重要であり、この特徴を見落としたことがジョゼフ・ラポルテとステファン P. シュワルツとの間に固定性概念をめぐる不毛な論争をもたらしたと主張する。

クリプキは『名指しと必然性』前半で固定性概念を固有名の例で論じたが、後半において固定性概念の適用範囲を自然種名へと拡張する。しかし指示対象の観点から見た場合、この拡張には問題があると考えられる。すなわち、一般名辞の指示対象が固有名の場合と同様に固定的でありうるのか、そしてそもそも固定性概念が一般名辞に対して適用可能なのか、という問題である。ジョゼフ・ラポルテとステファン P. シュワルツとはここ数年、この問題に関していくつかやりとりを交わしているが、両者の見解は対立するというようりすれ違ってしまった。そこで、本稿ではまず両者の固定性概念の理解を明示し、すれ違いの発端を明らかにする。

次に両者のすれ違いにおいて、彼らが互いの固定性理解へ歩み寄ろうとしないことと共に、固定性の関わる重要な側面を両者とも考

慮に入れていないと主張する。固定性が私たちのもつ直観的な可能性概念の展開を支え、対象との関係を保つ概念であるというクリプキのアイデア、またそれに伴う二種類の可能性概念である。ここで二種類の可能性とは、認識論的可能性と形而上学的可能性のことをいう。クリプキにとつて固定性は形而上学的可能性にとつて特化されており、二つの可能性概念は異なっている。以上にみたクリプキのアイデアはラポルテとシュワルツという二人の論者の固定性理解に影響を与え、彼らは不十分な理解を抱えたまま互いに批判しあっていると考えられる。

最後に、これらの点をふまえて両者のやりとりを見直すことで、彼らの論点にとつて固定性概念の理解の相違がどのような影響を与えているのかを検討する。

1. 固定指示の考え方とその一般的問題

クリプキがその著書『名指しと必然性』で示した固定性概念は、シンプルにもかかわらず様々な論争を巻き起こした。この概念は通常、次のように定義される。すなわち、なんらかの指示子があらゆる可能世界 (possible world) において同じ対象を指示すること。こうした特徴をもつ指示子のことを、クリプキは「固定指示子 (rigid designator)」と呼ぶ。反対にあらゆる可能世界において同じ対象を指示しない指示子は、「非固定または偶然的指示子 (nonrigid or accidental designator)」(Kripke 1980, p.48) と呼ばれる。クリプキの

用法で指示子とは、名前あるいは固有名と、確定記述の両方を指している (Kripke 1980, p.24)。またクリプキの用法で「可能世界」とは、いわば可能的状態のことであり、なんらかの「複合的な物理的実体」を指すものではない (Kripke 1980, pp.15-18)。

クリプキは『名指しと必然性』の中で、この固定性概念の適用範囲を固有名のみでなく自然種名辞へも広げている。この展開は固定性が論じられる場合に多く取り上げられるトピックの一つであり、今回取り上げた論者二人の争点でもある。というのも、一般的には単称名辞から一般名辞への範囲拡張だと考えることができるが、ここでは次のような問題が生じるからである。

「クリプキ」のような単称名辞の場合、指示対象は個体であると考えられる。そのためその存在論の問題をひとまず抜きにすれば、あらゆる可能世界において同じ個体を固定的に指示すると考えることができる。しかし「トラ」といった一般名辞の場合、指示対象が何であるかに共通の見解がなく、各可能世界において何を固定的に指示しているのかは単称名辞の場合に比べて不明瞭である。たとえばそれは個々のトラの集まりかもしれない、トラであるという特性なのかもしれない、あるいはなにか別の抽象的存在者なのかもしれない。もっとも、通常は名辞が指示するのはその外延、その名辞が用いられる世界を構成する存在者からなる特定の集まり、である。しかしこのように前提すると、各々の可能世界ごとにその世界を構成する存在者が異なる場合があり得る。そのため各々の世界で一般名辞が指示する対象は異なった構成をもつ別のものでありえ、その一般名

辞がある対象を固定的に指示する(すなわちどの可能世界でも同じ対象を指示する)と言うことができない。

外延が一般名辞の指示対象として適当ではないならば、他に候補はないようにみえる。この事実により、固有名から自然種名辞へと固定指示理論の適用範囲を拡張したクリプキが誤っていたのはいか、という疑念がわく。クリプキが正しいと言えるためには、少なくとも自然種名辞がなんらかの対象を固定的に指示すると言えないからである。

でもしクリプキが正しいとするなら、以上のような状況において自然種名辞、ひいては一般名辞が指示するものとは何か。それはいかにして固定的でありうるのか。この問題に対して、ラポルテとシュワルツは、それぞれの固定性解釈からまったく反対の答えを出している。

2. ラポルテの見解

まず、ラポルテの見解から始めたい。彼がこの問題に答える仕方は非常に単純である。以下を見てみよう。

「もし種類指示子 (kind designators) がその外延を指示するならば、固定的ではない。幸運にも、これらの名辞が指示するものに関して別の提案がなされている。ステイヴン・ベア (1985, pp.129-135)、キース・ドネラン (1983, pp.90f.) をしてファブリツィオ・モンダドー

リ(1978)らもみな、種類指示子は種類か、あるいはその他の抽象的存在者を指示するものと主張した。このことはドネランがそうしたように、ミルにしたがつてそうした名辞を「抽象名詞 (abstract nouns)」として考えるということである。

「抽象指示子」説がどのようにして種類指示子の固定性を可能にするかを理解するのは簡単である。すべての可能世界において指示されるものの問題は、次のように解決される。すなわちある種類指示子はまさに同じ抽象の種類(あるいはその他の存在者)を指示する、たとえもし各々の種類を例示し、その名辞の外延を形作っている具体的個体が、世界ごとに変わるとしても。」(LaPorte 2000, p.294)

ラポルテは、単称名辞が具体的な個体を指示するのと同じように、一般名辞もなんらかの個体のような存在者を指示していると考えた。そして種類指示子という呼び方で一般名辞を代表させ、それがそもそも抽象名詞 (abstract noun) であるという前提から、種類 (kind) という抽象的存在者を指示するのだと提案する。

先述のように、外延を指示する場合には各可能世界で含まれる個体が異なるせいで、「トラ」のような一般名辞はなんらかの対象を固定的に指示すると言えない。しかし、「トラ」という種類を指示すると想定すれば、「トラ」という「種類指示子」はまさにこの存在者をいずれの可能世界においても固定的に指示すると考えることができる。ラポルテはここでまず、単称名辞から一般名辞への拡張に際する問題を回避する。

また彼は、自然種名辞 (natural kind term) ではないせいで固定的でないと思われる一般名辞、たとえば「独身者」のような人工種名辞 (artificial kind term) も固定的だとみなすことができることを主張する (LaPorte 2000, pp.298-299)。「独身者」という種類を想定できるからである。このように、彼の見解ではどのような指示子にもその指示対象として種類という抽象的存在者を認めることができるため、簡単に固定的だと言いうる。その結果、すべての名辞が原理的にいつでも無差別に固定的でありうる。シュワルツのような論者は、固定性は自然種名辞と人工種名辞との区別を助けるものだと考えるため、このようなラポルテの考えは無意味に (trivialize) してしまふのではないかと危惧する。しかしラポルテにとっては、ある名辞が自然種名辞であるか否か、また単称名辞であるか否か、は固定的であるか否かの区別を左右するものではない。また反対に、固定的かどうかで、自然種名辞かどうかを見分けるものでもない。そもそもラポルテにとって、固定性概念はそのような役割をもつものではないからだ。

では、ラポルテはどのようにして固定的ではない指示子を固定的な指示子から区別するのか。その際に、必要となるのはどのような基準なのか。明確に述べている箇所は少ないが、幾つかの発言を合わせることで輪郭は捉えることができる。まずラポルテは「クリプキは「直観的テスト (intuitive test)」を固定指示子と非固定指示子とを区別するために提案している」(ibid.: p.307)と述べ、さらに、「このテストを自然種名辞について適用して見せた後で、次のように述べる。

「私たちは意図された種類を権利上固定的に指示する表現を、発明することができる。」(ibid., p.308)

このようにラポルテは、基準の選定を指示子を使用する使用者の解釈と判断にゆだねているようにみえる。言い換えれば、どのような名辞もそれを用いる人間の意図で固定的であると言え、それに対応する形で固定的ではない指示子を与えることができる、と主張しているようにみえる。たとえば「独身者」が固定的に独身者という種類を指示する場合は、「分析性にまつわる議論でよく話題にのぼる種類」のような指示子は独身者という種類を固定的に指示しないとされる。だが別の場合には、「分析性にまつわる議論でよく話題にのぼる種類」という名辞が固定的に〈分析性にまつわる議論でよく話題にのぼる種類〉を指示すると考えることもできる。ラポルテは原則、こうした固定性の推移と恣意的選択を禁止していない。それゆえ彼に従えば固定性の基準は絶対的ではなく、相対的であることになる⁽¹⁾。

ラポルテがこのような形で固定的な表現と非固定的な表現とを区別するのは、特定の言明が必然的に真であるかどうかを決定する目的にとつて、こうした形での区別が必要だと考えるからである。このことは次のような発言から読み取れる。

「「ミツバチ」のような表現が固定的であるということは、無意味(trivial)ではまったくなくようにみえる。その反対で、そのような

表現が固定的であること、そしてその他の「典型的に蜜で育つ昆虫種」のような表現が固定的でないこと、は重要なのである。こうしたことが重要なのは、どの言明が必然的に真であるかを決定するという目的にとつて、こうしたタイプの表現を区別することが必要だからである。種類のためのこれら二つのタイプの表現の間の差異はまさに、「ベン・フランクリン」と「二重焦点眼鏡の発明者」のような表現の間の差異が重要であるのと同じ理由で重要なのである。」(ibid., p.297)

ラポルテにとつて、固定性は名辞を含む言明の必然性を考察するために必要な道具である。さらに言えば、ラポルテにとつて、名辞の種類を区別すること自体は固定性にとつて重要な仕事ではなく、付随的な事柄でしかない。実際固定性は、名辞が指示対象を得るのほとんど役に立たない(ラポルテにとつて、その役割を担うのは指示の因果論である(LaPorte 2000, p.303)°)。

このようにみてみると、ラポルテの見解はクリプキの提示した固定性概念と可能世界との関わりをできるかぎり正しいと仮定したうえで、それを正当化するためには何が必要かを論じていると考えられる。しかし次に見るシュワルツの場合、現代的な形式意味論から考えると、クリプキの考えを支持することはできないという立場を取っており、そのためラポルテの提示する固定性解釈とはまったく異なる結論を導いている。

3. シュワルツの見解

以上のようなラポルテの提案に対して、シュワルツは、そもそも一般名辞に対して固定性を適用しようとする自体に無理があり、一般名辞に固定的・非固定的という区別は不要であるという立場から批判する (Schwartz 2002)。

シュワルツの立場からは、一般名辞の指示する指示対象の要請そのものがまず問題含みである。彼の立場では、名辞の指示対象は外延である。単称名辞の場合は、なんらかの個体がその外延にあたる。たとえば「ラポルテ」がひとりの人間を指しているということに、ひとまず誰も異議は唱えないだろう。ところが第一節で述べたように、名辞の指示対象を外延とした場合、一般名辞の指示対象の取り扱いは単称名辞に比べ難しくなる。

この問題に対してラポルテは、一般名辞の指示対象として種類を仮定することで切り抜けようとした。しかしシュワルツの考えでは「可能世界にはどのような種類もまったく存在しない」 (Schwartz 2002, p.268)。二人はこの点で真つ向から対立するのだが、ラポルテは論文の中では、種類がどんな存在者なのかを説明しておらず、どのようにそれを同定するのも、それらがどれくらい存在しているのかも説明しない。シュワルツとしてはこの点をはっきりさせない限りはラポルテの言う種類という存在者を認めることはできない。そしてこうした形而上学的存在者の問題は簡単に解けるも

のではない。それゆえ、固定性概念を、単称名辞と同様の指示対象を確保することで一般名辞にも適用しようというラポルテの道には、まず種類という存在者を導入する時点で無理がかかっているとシュワルツは考える (ibid., pp.269-270)。

またもしラポルテの言うように種類を指示対象として導入すれば、ラポルテ自身が気づいているように、自然種名辞と名目的種名辞 (nominal kinds term) とを区別する役割を、固定性概念に期待することはできない。つまり固定性がなんらかの実体への指示と名目的存在者への指示とを区別するという考え方は、ラポルテのやり方では採用できない。それゆえ前述のようにラポルテは、この仕事を指示の因果論というメカニズムに担わせるのである (Laporte 2002, pp.303-4) ⁽²⁾。

さらにシュワルツは、固有名を含む同一性言明と、一般名辞を含む同一性言明とのあいだにあると考えられているアナロジーは偽物だという (Schwartz 2002, p.270)。次の発言を見てみたい。

「ヘスペラスⅡフォスフォラス」は必然的に真であり、それ自身多少驚きを感じるものではあるが、しかし私たちはまたそれがアポステリオリであり分析的ではない——定義によって真ではない——ということをお思い出さなければならぬ。ヘスペラスⅡフォスフォラスは発見であり、当時は予期せぬ結果であった。こうした種類の同一性が(もし真ならば)必然的に真でありかつアポステリオリであり、分析的ではないと表明したことが意味論を飛躍的に前進させソー

ル・クリプキをまさに有名にした。では、「ミツバチ＝*Apis mellifera*」を考えてみよう。ラポルテのポイントに従えば、この主張が有効であるためには必然的に真であるだけでなくアポステリオリ―発見―でなければならぬ。しかし私はこの例がそうであるとは思えない。」(ibid., p.270)

なぜそう思えないのか。シュワルツは「水＝ H_2O 」の例を取り上げる。この同一性言明では「 H_2O 」によって、化学的組成が取り扱われている。この組成がなんらかの本質であると考えられるため、この言明はアポステリオリな真理をもつ。しかし、「ミツバチ＝*Apis mellifera*」の場合、「*Apis mellifera*」はその本質となるもの(たとえば DNA)を与えてはいない。それゆえ、シュワルツは次のように結論する。

「私は次のように言いたい。すなわち「ミツバチ＝*Apis mellifera*」の真理は発見ではなくむしろ決定に基づいており、それゆえその言明は本来分析的なのである。それゆえ、固定的な一般名辞をその種類を固定的に指示するものとして扱うラポルテの提案は、「ミツバチ＝*Apis mellifera*」の必然性を説明するのに必要ない。」(ibid., p.271)

確かに単称名辞の場合は、「ヘスペラス＝フォスフォラス」のような同一性言明についてアポステリオリな必然性を認めるために固定性という概念は必要かも知れない。しかし一般名辞を用いた同一性

言明は、アプリオリに必然的である。とりわけ名目的種名辞の場合に顕著だが、固定性を用いるまでもなく、分析的言明であるがゆえに必然的であると言いうるからだ。つまり二つの名辞のあいだの同一性は、発見されるのではなく、定義によって決定される。

結局シュワルツは、一般名辞の固定性を保持しようとするラポルテに反し、一般名辞の意味論にとって固定性概念は無意味であると結論し、固定性概念には何らの役割も期待しないのが得策だという立場を貫く。彼は指標的・非指標的、もしくは記述的・非記述的という区別のほうが一般名辞にとっては重要な区別であり、固定的・非固定的という区別はラポルテのような無理をしてまで導入する価値のないアイデアだ、と結論する。

ではシュワルツにとっては困難で無意味に見えた状況において、なぜラポルテは、種類という不自然な存在者を導入してまで、一般名辞の固定性を擁護しようとしたのだろうか。この点に関してラポルテ自身は、同一性言明の必然性との関わり以上の動機を語っていない。それに対してシュワルツは、次のように原因を予測する。

「私の見方では、ラポルテによる一般名辞の固定性の理解は単に、現実世界について話すときと同じように可能世界について話すときでも語が同じ意味をもっているという、明白でまったく面白くもない事実を反映しているだけである。つまりラポルテは固定性と意味の一貫性 (consistency of meaning) とを混同していた……。」(ibid., 272)

シュワルツによれば、ラポルテがこのように意味の一貫性と固定性を混同し、そしてそうまでして一般名辞に関して固定性を認めようとしたのは、自然種名辞の場合、その名辞の指示する集合が固定される仕方が「なんらかの仕方で固有名の働きの似ている」(ibid., p.275) からに過ぎない。しかしだからといって一般名辞の固定性を認めてよいことにはならない。一般名辞については固定性を持ち出すまでもないのだから。

以上のようにシュワルツにとって、固定性の果たすべき役目はまずなんらかの有意義な区別を一般名辞の意味論にもたらすこと、そしてアポストロリオリな必然性という概念をうまく説明することである。しかし固定性は一般名辞にとつてどちらの意味でも役に立たない。それゆえ彼に従えば、一般名辞について固定性を認める必要はないばかりか、かえって混乱を招くだけである。

4. クリプキの固定性概念

ここまでではラポルテとシュワルツそれぞれの見解について確認してきた。手短かに述べておくなら、ラポルテとシュワルツの間にあるすれ違いにおいてポイントとなったのは、まず名辞の指示対象をどう捉えるかということ、そして次に固定性にどのような役割を期待するかということ、最終的にはクリプキの路線を維持するかどうか、であった。一番のすれ違いが読みとれたのは、指示対象に関してで

ある。しかし二人がそれほど違う見解を持ったのは、固定性に対してどのような役割を期待し、クリプキの路線をどのように引き継ぐとしたかに依存していると言える。

そこでここからはクリプキ自身のテキストを参照しながら、彼自身の固定性概念がどのようなものであったかを描く。この節の目的は、クリプキが本来固定性に対して望んでいた目的を明確にし、後に行うラポルテとシュワルツの固定性概念検討の際の基準とすることである。

周知のとおり、『名指しと必然性』は記述理論批判の側面を持つ。クリプキはフレーゲ、ラッセル、サールら言語哲学の大家を取り上げ、彼らの示した記述理論は誤りであると糾弾する。ではクリプキが考える記述主義の誤りはどこにあったのか。それを簡潔に記している箇所が、原著前書きの6 (『ジ&邦訳』) にある。ここでクリプキは「アリストテレスは犬が好きだった」という例文を用いて、彼が主張する固定指示の理論とラッセルの記述理論との違いを説明している。「アリストテレスは犬が好きだった」という文をラッセル風に分析すれば、「古代最後の偉大な哲学者は犬が好きだった」と同義であり、またそれはさらに「古代の偉大な哲学者の中で最後の人は正にただ一人であり、かつてそのような人は誰であれ犬が好きだった」と分析されるべきである。

しかしクリプキはここに問題を見て取った。「古代最後の偉大な哲学者」という記述句と、「アリストテレス」とは、ラッセルによれば同義である。しかし古代最後の偉大な哲学者がアリストテレスでは

なかった反事実的な (counterfactual) 状況を考えることは可能であり (たとえばプラトンだったかもしれない)、そのような状況では、犬が好きだったのはアリストテレスではなく、その別の人物であることになる。

この結果、ラッセルの分析に素直に従うと、私たちが最初に考えようとしていたあのアリストテレスが犬好きだった可能性を考えることはできず、誰か別の人物が犬好きだった可能性を考えていることになってしまう。しかし、私たちは言うまでもなく誰か別の人物ではなく、あのアリストテレスについて考えたかったのであり、実際に私たちはそのようにしてアリストテレスについて可能性を考えている。それゆえこうしたことができないラッセルの理論にはどこかに不備があると考えなければならぬ。以上が、クリプキのいう記述理論の不具合である。

ここで、記述理論の不具合を正すために持ち出されるのが、固定性概念である。上述の前書きの箇所では次のように述べる。

「今やなじみの考えではあるが、固定指示の考えとその基礎となる名前についての直観とを、手短にもう一度述べておこう。以下を考えてみよう。

(1) アリストテレスは犬が好きだった。

この言明を正確に理解するためには、それが実際に真であるための (外延的に正しい) 条件、および、現実の過程にある点では似ているが他の点では異なっているような歴史の反事実的な進み方が

(1) によって正しく (部分的に) 記述されるための条件、の両方を理解しなければならない。特定の一人の男——われわれが「アリストテレス」と呼ぶ哲学者——がおり、実際に彼が犬好きであった時、そしてその時にのみ (1) は真である、ということには誰しも賛成するであろう。固定指示のテーゼは——微妙な点はさておき—— (1) が反事実的状況を記述している時にも、同じ範例が (1) の真理条件に対して当てはまる、ということにすぎない。つまり (1) が反事実的状況を正しく記述するのは、当の状況が成り立ったとして、前述の同じ男が犬好きであった時、そしてその時に限るのである。」 (Kripke 1980, p.6)

また別の箇所ではこうも述べている。

「そのようなわけで私が一番言いたいことは、われわれは名前が固定的であるという直接の直観をもっており、それは特定の文の真理条件についてのわれわれの理解に現れている、ということである。それに加えて、私が本文や他の所で言及したような「われわれが言うおとしたこと」についての様々な二次的現象は、固定性の間接的証拠を与えてくれる。少なくともラッセルは、なぜ固定性に関するわれわれの直接的な直観と明らかに相容れないような理論を提案したのか。その理由の一つは、他の所々と同様に「ここでは、彼は様相の問題を考慮しなかったということである。」 (ibid., p.14)

以上の発言からまず読み取れるのは、ラッセル流の記述理論が、様相概念の考察において不具合を起こすということ、またラッセルは様相を理論構築の際に考慮に入れなかったのだという主張である。しかし、これだけではまだ、クリプキの固定性概念が記述主義の不具合を補正するのにどう効いてくるのが明確ではない。ラッセル流の記述理論にはなく、固定性概念導入後のクリプキの考えにあるのは何か。なぜラッセル流の記述理論は様相を考察する場合に不具合をもたらすのか。そして固定性概念を取り入れることでなぜその不具合が解消されるのか。

端的に言えば、ラッセルの記述理論では、ある特定の対象について何らかの言明をなすことができない。そしてクリプキは、そのことを様相言明の考察を通じて提示した。単に名前を記述の省略形として考え、文を記述へと分析するだけでは、わたしたちがいったいどの対象について話しているのか、ということとは特定できない。なぜならどこまで分析しても記述は記述であり、記述とある特定の対象との間にはなんの繋がりもないからである。それが反事実的状况において、偉大な哲学者がプラトンであってしまふことの主因である。それゆえクリプキは、私たちがあつた特定の対象についてなんらかの言明をなそうとする場合、なんらかの方法で名前と対象との間に指示関係が確保されなければならないと考えた³⁾。そして、特定の対象への指示が常に参照されねばならないというアイデアを、固定性概念という形で意味論へ取り入れようとしたのだ。

こうした経緯で導入された固定性概念は、『名指しと必然性』の中

で次第に形式的に整えられ、冒頭に示したような定義によって語られることになる。

5. 二種類の可能性概念と固定性

『名指しと必然性』前半において導入された固定性概念、あるいは固定指示という考え方は、クリプキがその後議論を展開していくうえでさまざまな形で参照される。そしてどこどこで顔を覗かせていたアプリアリ・アポストリアリという認識論的概念と、必然的・偶然的という様相的もしくは形而上学的概念との区別を応用し、同一性言明の必然性を扱うのが、第二講義から第三講義である。本節ではラポルテとシュワルツのすれ違いにとつてより具体的な要因となる、二種類の可能性と固定性概念との関わりを描く。

クリプキは第二講義で次のような例を論じている。すなわち、ヘスペラスはフォスフォラスであると仮定したとき、ヘスペラスがフォスフォラスではないような、可能な状況とはどのようなものなのか (Kripke 1980, p.102)。まず思い浮かぶ答えは、二つの異なる星を「ヘスペラス」と「フォスフォラス」と名づけた、という状況である。確かに、そうした状況は可能だ。では次に、その状況は、ヘスペラスがフォスフォラスではなかったような状況だろうか。そうではない、がクリプキの答えである。

この言い方は一見矛盾しているように見える。しかし実際にはクリプキが、自身の枠組みを用いて明晰に分析する。まずは次の発言

に注目したい。

「ヘスペラス」と「フォスフォラス」が、それらが現にその名前であるものの名前ではなかったような、可能世界、可能な反事実的状況があるかもしれない。誰か、もし彼がそれらの言葉の指示を同定的記述によってまさに決めたのであれば、その誰かは私たちが使ったまさにその同定的記述を使いさえしたかもしれない。しかし、依然として、それはヘスペラスがフォスフォラスでなかった状況ではない。というのも、ヘスペラスがフォスフォラスであるなら、そのようなケースはあり得なかったからである。」(Kripke 1980, p.103)

最後の数行はクリプキ自身も言うように「奇妙」である。ヘスペラスがフォスフォラスでなかった状況はありえない、と書かれた数行の、一見矛盾して見える見解を正確に理解するためには、一つの区別がつかなければならぬ。この文中で用いられる「かもしれない (might)」と「しえない (couldn't)」の区別である。前半部分、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」とが現に名指されているものとは別のものの名前であったかもしれないような、反事実的状況を想定する箇所では、クリプキは「might」を用いる。他方で後半部分、それはやはりヘスペラスがフォスフォラスではないケースではあり得ないと述べるときは「could」を用いている。ここで、単に文法上の必要性から彼がこうした表現をしているのはもちろんだが、同書の前半から彼がずっと示していた認識論的概念と形而上学的概念と

の区別をここでの表現へ重ねると、うまく重なり合うことがわかる。この対応には根拠がある。根拠のひとつはこの引用文以前に認識論的概念と形而上学的概念とがすでに区別されていたということである。すなわち、アプリーオリ・アポステリオリと必然性・偶然性とは異なる概念だということを、クリプキは再三にわたって述べてきた。もうひとつの根拠は、この引用文の直後に、クリプキ自身が述べている。

「まず第一に、一つの意味で物事がどちらにも転びえたということとはその通りだが、そこにはその最終的な転び方が必然的ではないということとは含意されていない、ということでは明らかである。たとえば、四色問題は真であることが判明するかもしれないし、偽であることが判明するかもしれない。どちらにも転びうるのである。それでも、その転び方が必然的ではないということを、それは意味しない。明らかに、「かもしれない (might)」はここでは純粹に「認識的」である——それは単に、われわれの現在の無知あるいは不確実性の状態を表しているにすぎない。」(ibid., p.103)

この箇所においてクリプキは、「かもしれない」という言い方で示した可能性が認識的であることを示している。そしてそれが可能性というよりもむしろ不確実性と呼ぶのにふさわしい観念であると述べる。他の箇所での記述によれば、これが可能であるのは、現実世界と質的に全く同一の状況を想定することができ、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」が別々の星を指示しているという世界を考える

ことが可能だからである。この、「質的に同一の状況」という言い方で展開される可能性概念が、一つ目の可能性概念である。この考え方は記述主義を採用した場合の可能性概念であると言うことができ。つまり対象との関係という側面は見落とされ、固定性は想定されない。このような可能性を、可能性1と呼ぼう。

ところがこの引用箇所でクリプキは、そのような認識的不確実性が、必然的（および偶然的）という概念とは区別されるべきだという考えも示している。つまりヘスペラスがフォスフォラスでなかったような状況）がありえないのは、認識論的不確実性とは別の問題である、というのだ。クリプキとしては、認識的な立場がはっきりしてしまえば、可能性1のような、記述主義的な想定をもとにした不確実性とは異なる可能性を考えることになる。それが「われわれが前もって知っている限りでは、ヘスペラスはフォスフォラスではなかったとしても、ある意味で、ヘスペラスがフォスフォラスでないことはいかなる形でもありえなかった。」(ibid., p.104)といった言い方で繰り返し語られる、別の種類の可能性である。次の箇所も見てみたい。

「これらの名前を今まさにわれわれが使っているように使う限り、われわれとしては前もって、もしヘスペラスとフォスフォラスが同一物であるならばそれらはいかなる他の可能世界においても別物ではありえない、と言えるのである。」(ibid.)

ここにおいて意図されている名前の固定性と、同一性の必然性が、

クリプキが認識的不確実性とは区別して用いる可能性概念の鍵となる。まず直観的な名前の固定性が、対象と名前との間にある関係を示し、各可能世界においてその対象を指示する固定指示の理論を導く。「これらの名前を今まさにわれわれが」使うのである。さらに同一性の必然性は、「ヘスペラスがフォスフォラスでないことはあり得ない」と言われる際の必然性を導く。クリプキのテキストにおいて同一性の必然性はそれだけで一つのテーマとなりうるが、ここでは同一性という関係が、いかなる場合も保たれるゆえ、あらゆる可能世界においてもまた保たれると想定されている、と指摘するに留める。

ではこうした道具立てで「ヘスペラスがフォスフォラスでないことはあり得ない」という直観的な必然性を展開するとどうなるか。まず現実世界において、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」という名前は一つの天体、金星を指している（クリプキが直観的な部分を大事にしている必然性は、常にこの現実の状態から始まる）。つまり、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」という名前が（あの星、と命名したというような）ある繋がりを金星との間にもつており、その金星は一つの天体であるという現実である。またこのとき、金星が一つの天体であることで、「ヘスペラス」と「フォスフォラス」という名前は同じ対象を指示している、すなわち両者の指示対象が同一であると言うことができる。さて、このような「ヘスペラス」と「フォスフォラス」が他の可能世界において、「ヘスペラスはフォスフォラスではない」ことができるだろうか。できない。なぜなら私たちが展開している可能世界は、現実世界において金星を指示している

二つの名前についてのものであって、それ以外のものではないからである。「ヘスペラス」は固定的に金星を指示し、「フォスフォラス」も固定的に金星を指示する。そして金星は一つの惑星であるから、「ヘスペラスはフォスフォラスである」という言明は必然的な言明なのである。

後者の可能性概念を可能性2と呼ぶことにすると、可能性1と2との間の差異はこれまでの間に明確になったと信じたい。すなわち、可能性1は認識的側面に関わる可能性であり、アプリアリ・アポステリアリ概念を説明するのに役立つ。また可能性2は形而上学的側面に関わる可能性であり、必然的・偶然的概念を説明することができる。可能性1においては、可能世界は純粹に質的に与えられるせいで、ある特定の対象について考えることができない。こちらは記述主義を採用した場合の可能性概念とも重なり、ここにおいて、対象と名前の現実世界での関係は切れている。しかし可能性2においては、可能世界は純粹に質的に与えられるのではなく、まさにある特定の対象について、ある対象を指示する名前を用いて考えることができるものである。この点では必然性概念と関わるゆえに形而上学的と呼ばれながらも、可能性2はある意味で強く認識的側面も持っている。

6. ラポルテとシュワルツの固定性解釈

以上に見てきたクリプキの固定性概念および二つの可能性概念に

照らしてラポルテとシュワルツの固定性解釈を振り返ることにする。その際注意すべきなのは、クリプキの想定した固定性の有用性を両者がどこまで理解しているかであり、それによって両者が固定性と可能性との関係をどのように捉えているか、である。

まずラポルテを考えてみたい。ラポルテにとって、固定性は必然性を調査するために必要な概念だった。この点を強調し、どうにか一般名辞についても固定性を維持しようとしていることから、ラポルテがクリプキのラインをしっかりと守ろうとしていることが読み取れる。また多少強引ではあるが、種類という存在者を導入し、一般名辞が繋がりをもつ対象という観点をはっきりさせた点でも、固定性概念にとって重要な側面を維持していると考えられる。このように、ラポルテは固定性概念をクリプキに忠実に理解し、それを元に一般名辞の固定性を展開しようとしていることから分かる。つまり、彼の言う可能性はクリプキにおける可能性2、形而上学的可能性である。

ただし彼の言う種類という存在者について不明な点は残る。何らかの現実世界における対象との指示関係を保つという固定性の役割にとって、種類という抽象的存在者は、果たして現実世界における対象と認めることができるのか。ラポルテはこの点に関して明言していない。もしラポルテが抽象的存在者について、名目的態度を取るのであれば、彼の固定性解釈、および可能性解釈は非常にクリプキに忠実でありながらも、その精緻化の段階で異なるものになったと言える。

他方で、シュワルツはどうだったろうか。シュワルツは、ラポル

テが固定性と意味の一貫性を混同していると指摘している。そして彼は、一般名辞に関しては、指示対象を前提とした固定性概念を持ち出さなくとも、意味の一貫性のみで似たような振る舞いを説明できると考えている。確かに、私たちが現実世界で意味しているのと同じことを、可能世界でも意味していると言うことによって、固定性が含意している効果のある側面を取り出すことはできる。しかし、それで十分ではない。(4)

つまり、同じことを意味している、と言うことで、一般名辞の固定性において意図されていることは十分だというシュワルツの言い方には、現実世界における指示対象という要素が入ってこない。そこには、現実世界との繋がりがまったくない。固定性概念をここであえて持ち出さなくてはならないとクリプキが主張するのは、記述主義的な、名前と記述の往還で終わってしまうことなく、現実世界への指示の側面を示唆するためである。それゆえ、その指示対象がいかにして現実世界の存在者に指示関係を保っているかはともかくとして(それには別の指示の理論がまた必要になる)、なんらかの現実世界との関係を保つために、一般名辞がある対象と繋がりをもち、それを記述の手助けを通じて、あらゆる可能世界で固定的に指示する、という言い方が必要になる。それが固定性概念に込められたもう半分の含意である。

確かにクリプキやラポルテはここで、種類 (kind) というあやしいな存在者を持ち出しており、シュワルツがその種類のある種の定義や特性と解釈し、すべて意味でおさまりがつく、と考えるのは無

理もないことだ。しかしクリプキが新しかったのは、それでは私たちがいつたい何について考えているのかは説明できていない、と気がついたところだった、ということを思い出さねばならない。記述と名辞の往還だけでは、私たちがあつた個別的对象について考えるということの説明できなかつたのだ。

またこの場合重要なのは、個別的对象で言われている個別性が、単称名辞と一般名辞との区別に代表されるような、個物と普遍の対比の意味での個別性ではなく、それぞれの言明が取り扱われるさいう点だ。クリプキが常々「今われわれが」という仕方である、というのはこの側面である。このため扱われているのが一般名辞であろうが、単称名辞であろうが、固有名であろうが、自然種名であろうが、それらは各言明ごと、各発話ごとに、個別的对象との関係性を前提とし、その確証のために固定性というものは必要とされている。

それが何らかの、意味論上の意義をもっているからというわけではないのである。その点に、シュワルツは注意が必要だった。固定指示理論のもとになった直観的な固定性は、本来形式的概念ではなかつた。そしてその形式化の過程において、さまざまな困難を露呈することになった。シュワルツは、形式意味論の側面を整合的に保つために、クリプキがかなりインフォーマルな仕方を持ち込んだ固定性概念を、無意味化してしまつたのだと考えられる。そしてその結果として、シュワルツの考える可能性概念は、固定性をもたない可能性Iと同じものになつているといえる。

7. 結びに換えて——一般名辞の固定性

以上にみたように、ラポルテは可能性2をクリプキの直観に従う形で理論化しようとし、シュワルツは形式意味論の整合性を重視することで可能性1へと収束していった。彼らはともに一般名辞の固定性について考え、議論を交わしてはいるが、その実彼らの見て取る固定性概念には偏りがあり、異なる種類の可能性概念を前提としたままであったため、結果的にすれ違うことになってしまった。

では一般名辞の固定性にまつわる問題について、結局どちらが正しかったのだろうか。

結論から言えば、ラポルテも、シュワルツも、そしてクリプキ自身でさえ、一般名辞における固定性という概念を十分に展開できていない。クリプキおよびラポルテに関して言えば、直観的な固定性を重視するあまり、種類という存在者に関する考察がお粗末になっている。たとえばクリプキは「トラ」を特に疑問も持たずなんらかの種を指す名辞として用いるが、現実的に考えて、ある動物について何らかの種 (species) というまとまりを確定することは簡単ではない。というのも生物は進化するものとされており、現在持っている特性を将来的にずっと持ち続けるとは限らない。さらに、異なる種とされている個体群の間に、ある区切りをもちたらず特徴の識別についても、遺伝子を用いるのか、外見の特徴を用いるのか、等について議論があり、またそもそもある形質を別の形質から区別するこ

とも恣意性を払拭できないままである。⁽⁵⁾ つまりクリプキのやり方は言語的側面に偏ってしまっており、生物学という領域で利用される種 (species) とクリプキの言う一般的な意味での種 (kind) とはうまく対応しない。⁽⁶⁾

また一般名辞というくくりで示される語は実際のところ多岐にわたり、それらすべてにとつて共通する指示対象を得ること自体が困難であるようにみえる。それゆえ、クリプキが当初持っていた直観的側面を維持しようとするならば、その理論の精緻化は、そのままの形では極めて難しい。しかし、シュワルツのように形式意味論にとつて整合的な形で整備しようとするれば、その直観的側面を置き去りにしてしまう危険性がある。

もし、固定性概念はのもつとも原初的な形からは離れる仕方では論じられる他ないのであれば、そして、もし固定性概念について当初の想定を正確に記そうとすれば、クリプキが行ったように、「見取り図」という仕方ですす他ないのかもしれない。

脚注

(*) 本稿は、二〇〇七年十一月一〇日に行われた日本科学哲学学会第四〇回大会における、口頭発表の原稿に、大幅に加筆訂正を施したものである。また発表の際のタイトルは「固定性はいかにして有用か—クリプキ流本質主義にまつわる一つの問題—」であった。

(1) (1)での叙述はラポルテ (LaPorte 2000) のオリジナルの主張とは多少異なる。本来のラポルテの論証に従えば次のようになる。まず、ある

名辞の指示を固定的だとする場合、その名辞の選定および対応する形で示される非固定的な指示子の選定が恣意的だという批判が加えられるという、彼自身の想定があった。それに対してラポルテがさらに行った反論は、単称名辞に関してもそうした恣意性が必要であるというものである。この反論は決して説得的とは言えない。しかしこの問題自体は、単称名辞がある個体を指示するという立場をとる限り、そしてそのような指示を行う名辞と記述との対比で固定性を考えていく場合、避けられない。それゆえラポルテの論述は解決を導くというよりも、この問題を固定性の議論がはらんでいることを指摘しつつ、なおそれを抱えた形でどのような拡張が行われるのかを考察しているようにみえる。

(2) シュワルツは、固定性概念と指示の因果論とを切り離れた点では、ラポルテを評価する。

(3) それがどのような方法であるかについては、現在「指示の因果論」と呼ばれている考え方が、そうした方法の原型として本文にて提示されている。

(4) ここにおいて「意味」が何を指して言われているのかには注意が必要であり、これを論じるにはさらに別の論文が必要である。(ここで指摘したいのは次のことである。名前の固定指示や、記述主義者たちの省略説が、まさに意味の説明のために作られた理論だということを思い出せば、ここで「意味」という言葉を持ち出して問題を片づけようとするシュワルツの態度は、受け入れるのに慎重にならねばならない類のものである)。

(5) 以上の議論については、Kim Sterelny, Paul E. Griffiths (1999/06)や Massimo Pigliucci and Jonathan Kaplan (2006)を参照。

(6) ただし、近年ではクリプキ流の本質主義を生物学で利用可能な形で取り込もうという方向もみられるようである。網谷 (2007) を参照。

参考文献

- 網谷祐一 (2007) 「生物種のクリプキ流本質主義」『人文知の新たな総合に向
けて(二十一世紀COEプログラム)「グローバル化時代の多元的文学
の拠点形成」第五回報告書』。
Boer, S. (1985) "Substance and Kind: Reflections on the New Theory of Reference"
in B. K. Matilal and J. L. Shaw (eds.), *Analytical Philosophy in Comparative
Perspective*, Dordrecht: D. Reidel, pp. 103-150.
Chalmers D.J. (1996) *The Conscious Mind*, Oxford University Press (チャーモース
D. J. 林一訳(2001)『意識する心 脳と精神の根本理論を求めて』(白揚社)。
Daly C. (1998) "Natural Kinds" in *Routledge Encyclopedia of Philosophy*, version 1.0
Donnellan, K. (1983) "Kripke and Putnam on Natural Kind Terms" in Carl Ginet
and Sydney Shoemaker (eds.), *Knowledge and Mind*, Oxford University Press,
pp.84-104.
Kripke, S. (1977) "Speaker's Reference and Semantic Reference" in *Midwest
Studies in Philosophy* 2: 255-76. (クリプキ S. 黒川英徳訳 (1995) 「話し手
の指示と意味論的指示」『現代思想』vol.23-04)。
—— (1980) *Naming and Necessity*, Harvard University Press (クリプキ S. 八木
沢敬・野家啓一訳 (1985) 『名指しと必然性』産業図書)。
Laporte, J. (2000) "Rigidity and Kind" in *Philosophical Studies* 97(3), pp.293-316.
—— (2004) *Natural Kinds and Conceptual Change*, Cambridge University Press.
—— (2006) "Rigid designators for properties" in *Philosophical Studies* 130,
pp.321-336.
Mondadori, F. (1978) "Interpreting Modal Semantics" in F. Guenther and C. Rohrer
(eds.), *Studies in Formal Semantics*, North-Holland Publishing Co., pp. 13-40.
Pigliucci, M. and Kaplan, J. (2006) *Making Sense of Evolution*, The University of
Chicago Press.
Schwartz, S. P. (1980) "Formal Semantics and Natural Kind Terms" in *Philosophical*

Studies 38, pp.189-198.

——(2002)“Kind, General Terms, And Rigidity: A Reply to LaPorte”, in
Philosophical Studies 109, pp.265-277.

Strevly, K. and Griffiths P. E. (1999/06) *Sex and Death: An Introduction to
Philosophy of Biology*, The University of Chicago Press.

On the Usefulness of Rigidity and Two Possibilities

MOTOYAMA Asuka

Abstract

This paper claims that Saul Kripke's notion of rigidity is related to two kinds of possibilities and that the discussion between Joseph LaPorte and Stephen P. Schwartz is not fruitful, because they miss this nature of rigidity.

In *Naming and Necessity*, Saul Kripke argued about the notion of rigidity for proper names. Recently LaPorte and Schwartz have discussed about the applicability of this notion to general terms. But in this discussion, their positions are totally opposite. Particularly in the problem concerning the referents of general terms, their views shows a great difference.

What is crucial in this opposition is the lack of sufficient understanding about some important aspects of rigidity. Firstly in Kripke's explanation the notion of rigidity underlies our intuitive understanding about possibilities and holds the relations between names and objects. Secondly rigidity relates two kinds of possibilities, which are the epistemic possibility and the metaphysical possibility. Thirdly rigidity is needed only for the latter, metaphysical one. But both LaPorte and Schwartz understand rigidity in relation to one of two possibilities. LaPorte's understanding about rigidity belongs to metaphysical possibility and Schwartz's to epistemic one. Lastly I will claim that it is very difficult to formalize the notion of rigidity, because this notion is very intuitive in its original version.

Keyword: rigidity, Saul Kripke, descriptionism, general terms, two possibilities